

京都女子大学 栗原ゼミ

観光データ可視化ツール「京都ツーリズムインサイト」の開発と提案

受賞：翻訳サイエンス賞

■ 発表概要

京都府庁との連携PBL授業から生まれたプロジェクト。「データはあるのに政策につなげる翻訳が追いついていない」という行政の課題に応え、誰でも観光データを集計・可視化できるWebダッシュボードを開発した。

■ 開発の背景

PBLでの気づき

- 膨大なデータから何から始めればよいか見えない
- 分析担当者に偏り、全員が議論に参加できない
- 基礎集計による仮説設定の重要性を実感

行政からの声

- 「データは山ほどあるが政策への翻訳が追いつかない」
- 「専門的な分析スキルがないと意味を読み取れない」
- 誰でも使える翻訳支援システムの必要性

■ ダッシュボードの概要

- データ：インバウンド消費動向調査（2024年4～6月）26,078人分→京都訪問8,086人を抽出
- 変数：2,082項目（属性・観光スタイル・消費等）「もう一つの京都」のエリア区分を対応
- 操作性：2ファイルをアップロードするだけで主要指標（観光客数・平均消費額・平均宿泊数）と各種グラフを自動表示
- フィルター機能：出身地域・年齢層・来日回数・訪問エリア・市区町村別などをチェックひとつで絞り込み

■ 活用事例

【例】20代・来日2回目・京都市以外を訪問した人をアジア出身／非アジア出身で比較すると、入国都道府県の違いが明確に。アジア圏は大阪（関空）経由が多いため「リムジンバスの積極的導入」、非アジア圏は関東からの入国が多いため「関東からの誘致強化」という政策仮説が立てられる。

■ 今後の展望

- 行政の意思決定支援から地域商店街・DMOへの展開
- 地域の人々の感覚（「最近これが売れている」）を入力できる機能の追加
- 多言語対応・他府県への横展開も視野

■ 審査員コメント

「データが共有され誰もが対等に議論できる場合は、新しい観光アイデアの源泉になる。地域の温かい思いとデータを結びつける地域創生提案として非常に優れている」（工藤審査員）

「地元の人々の感覚を組み込める設計が差別化ポイント。旅行会社やDMOへのPRを積極的に進めてほしい」（杉岡審査員）

